月に天ぷら

山田スウェル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
月に天ぷら

【Ｎコード】
Ｎ３３２６Ｚ

【作者名】
山田スウェル

【あらすじ】
一度は書かされた将来についての作文。思えば僕は野球選手になりたかった。あれから何年か経ち、僕は大人になり初恋の人は自殺した。そして彼女には娘が居たらしい。
思春期、彼女を思い何度か果てたからか、父親が定かでないと噂される少女におかしな父性を覚えてしまう。
まるで、あの日の延長上に生きている少女は僕に言う。

一緒に死んで下さい。

1

1

誰でも一度くらい就きたい職業についての作文を書かされただろう。僕の頃は夢を与えると言われる世界に憧れる一方で、公務員を目指す奴等も多かった。
生きていれば今年で３１歳になる牧野がなりたかったのも、教師だった。

僕は今、牧野が飛び降りたホームに居る。同窓会に出席するのを口実に帰ってきたんだ。
思えば二年振りになろうか。彼女の存在を知ってから足は遠のくばかりで、母やチロの死でさえもを足を動かせなかった。

ベンチに座ったままで煙草を吸うでなく、紅茶も飲みやしない僕を隣の学生が気持ち悪い男だと打ち込む。その感覚は正しい。

僕は気持ち悪い。

有給休暇を使ってまで、ここへ戻るのをミキに言われた。ミキからしたら堕胎手術は付き添わなかったくせ、友達が居ない同窓会へは出席するなど気持ち悪い。確かに。その感覚も正しい。

けれど、ひとつ訂正する。親しい友人が居ないだけ、だ。クラスメイト等と会話を弾ませる自信はある。例えば久しぶりに見た街並

みの話をしよう。随分と整備され、駅前通りは賑やかになった。商業科出身の何人かはそこのショッピングセンターで働いているんじゃないか。屋上に繋がれた気球が風に煽られている。
それに母校の制服も変わったらしい。オシャレになったかと聞かれたら微妙なものの、隣の彼みたいな着こなしは出来ないと思う。だって僕は地味な学生だったから。

やっと煙草をくわえ、ボストンバッグからライダーを引きずり出す。とりあえず3日分の下着を放り込んできた。
実家じゃ未だ二層式の洗濯機が動いている、なんて都市伝説めいた事を言う父が僕の帰りを本気で待っているとは考えられない。母が亡くなり、僕らの距離感は絶対なものになった。
言うならば父と僕の間には川が流れている。桃は流れて来ないが、この川はサワガニが生息出来るほどキレイな水が流れるんだ。

川の話をするとミキは露骨に嫌な顔を浮かべ、酔っているのかって聞く。父と僕の間に清流があるなら僕とミキを隔てるのはアルコール。
いつだって酔っているのはミキだ。納得できない事を僕と酒の所為にしてしまう。

と、携帯電話を開けばミキからの着信が数件ある。駅に着いたが待ち合わせの相手が来ない旨をメールで告げ、電源を落とす。

何本か行き交うと男子校生は居なくなり、また知らない誰かが隣に座る。乗り換え路線などない、登りと下りしかない小さな駅だが何故か下車して座る。見れば、次に隣へ座った少女は椅子の上で体育座りをし、空を仰いでいた。

ホームは簡素な作り。中央に駅名を書いた看板とベンチ、灰皿が

設置されているのみだ。雨風凌ぐ覆いがないのだから、分煙の概念など存在しない。
何かと禁煙を強いられる都市部と違い、田舎は相変わらずこうした部分に寛大だ。けれど、こんなに緩い景色も牧野を突き落とすんだろう。

「なぁなぁ、牧野が死んだって」

風がもう一度強く吹いた時、あの日の声が聞こえてきた。待ち人の到着に慌てて顔を上げると、車内の彼は僕の隣を見ており、隣の少女が僕を見ていた。視線が妙な絡まり方をする。

ちりん、ちりん。少女の鞄に付いた鈴が警戒するみたいに鳴っていた。

2

2

――1995年、初夏。僕は高校1年生だ。

実家が鞄屋を営んでおり、商業科への進学は暗黙の了解だった。
と言うより、うるさく言われてまでやりたい事など無いし、こうして黙って座っているのが賢明だ。
夏休みを控えた教室内、僕はそれが格好いいと疑わず、冷めた構えを意識している。

牧野ユズは僕と同じくらい目立たない生徒で、担任教師が今日で欠席が3日続いていると言わなければ誰も気に止めなかっただろう。牧野の机にはプリントが溜まり、誰かが見舞いを兼ねて牧野の自宅を訪ねなければならないらしい。みんな、視線で探り合う。

もちろん、牧野の家に行くのは面倒だ。けれど新任教師に食事を奢らせるにはいい理由になりそう。
内緒でバイトをしている奴も居るが、放課後の空腹を満たせないのが現実だ。それに担任の相沢は美人で、涼しげな目元は男子生徒に受けがいい。

「はい、はいー！　俺、成海が行きます」

やはり、と言っていいだろう。彼が名乗りを上げた。

「こら成海くん、遊びに行くんじゃないのよ？」
「やだなー相沢ちゃん、分かってるってば」
窓側の一番後ろから笑う。生暖かさが僕の背を叩き、振り返るとなるちゃんと目が合った。すると頷くよう促された。
「ほらー渡辺くんだって、頷いてるし」
なるちゃんは行儀悪く足を机へ乗せ、椅子を上下に揺らす。クラスメイトは渡辺と指さされた僕を確認し、気まずい顔を浮かべた。母の再婚は決して悪い事じゃない、ただ再婚相手が良くないだけだ。相沢さえ不安な面持ちで僕を見る。
「あの良かったら、渡辺くんも一緒にどうかな？　牧野さんと同じクラブでしょ？」
努めて明るく誘ってきた。
「えー、俺と2人きりで行こうよぉー。帰りはラブホに入ろ！　俺の童貞貰ってよ」
なるちゃんの半分本気な発言が笑いを起こす。と、相沢は叱るでなく、むしろ救われたとばかりに胸を撫で下ろす。
相沢になど期待していない。とはいえ、裏切られるとは思っていなかった。
熱を持って教育にあたる、相沢は最初に言った。ベテラン教師には見えなくなっているものがあるはずだって言ったんだ。

僕は肯定も否定もない姿勢をする。頬杖し、文庫本をめくるんだ。牧野ユズもこの本を読んだのだろうか。月に2冊読むのが文芸部の活動内容で、感想文の提出は無く、読了報告さえ不要だ。結果、僕のような生徒ばかりが文芸部に在籍している。

「じゃあ、渡辺くん。放課後、職員室まで来て下さいね」

言われたから顔を上げたのに、相沢は出席簿へ逃げる。生え際が目立ち始めた相沢は女子等に美容院を紹介されるが、暇と余裕が無いと切り捨てた。

赴任してきて3ヶ月経つが、まだ生活に慣れないのだろうか。父の事などすぐ調べたくせに。

相沢の性格は授業にも表れている。試験に必要か不必要かを明確にし、出題する部分にはラインを引かせる。相沢はこれと同じ要領で、僕との間にも線を引いたんだろう。

人を殺した父を持つ僕が、相沢にとって必要か不必要かなど、考えるまでもない。

僕の母は道にゴミが落ちていれば拾える女性だ。当たり前だけど、なかなか出来るものじゃないと言われたい。だから気付けば記憶にある母は屈み、透けた後頭部を僕が見下ろす僕が居る。

母さん、その姿をいつからか呼び止められなかった。

僕となるちゃんは並んで校門前に立つ。思えば入学式の時、母となるちゃんのおじさんとで写真を撮った。あれから数ヶ月、僕の背はなるちゃんを随分と追い越し、赤い髪や着崩した制服がより人事

と感じられる。

なるちゃんが僕をどうでもいいよう、僕だって幼馴染みがどうだって良かった。

朝は自転車を引いて上ってくる程の坂道が、帰りになれば吸い込まれるよう消えていく。

なるちゃんが黙ってこの景色を見続けるなら、僕も倣おう。

放課後、相沢を訪ねると立て込んでおり、車をこちらへ回すとだけ言われた。職員室全体が騒がしかったので、誰かが問題を起こしたのかもしれない。２週連続で全校朝礼が行われると考えると嫌な汗が背を伝う。

熱の籠もる体育館はとにかく臭うんだ。母に言わせれば一過性らしいが、僕は人の臭いに過敏でシャンプーや柔軟剤の香りでさえ吐き気を覚える。実際、戻してしまった事もあった。

ただ、なるちゃんは着飾ってる割に刺激が少ない。無臭とまではいかないが側には居られる。

と、なるちゃんの穴が空いた耳から、向かってくる軽自動車が見えた。

「お前、助手席な」

早口で命令され従う。ドアを開けると相沢が意外そうな顔をした。

「何ですか？」

「あ、ううん。シートベルトはしてね」

乗車するなり、芳香剤の臭いが鼻を刺す。甘ったるいココナッツの香りは相沢に似合わない気がするが、灰皿代わりの空き缶を見付け納得した。

僕の視線を辿り、一旦は隠そうとする相沢も、淵にあった吸い殻を押し込んで諦める。

「先生、タバコ吸うんだーカッコいい！」

さっそく、なるちゃんが茶化す。

「格好良くありません。吸わないでいられるなら、それにこした事はないよ」

「つまりストレスって訳？」

遠慮無しでくつろぎ始める、なるちゃん。靴のまま足を伸ばし、窓を開ける。相沢はそんな無礼を咎める為に隙間へ乗り出し、僕の目の前が白いブラウスになった。生地で黒の下着をはっきり透かし、制汗剤の臭いも漏れてくる。

「あ、痛て！　やめてよ先生！」

「ほら靴を脱ぎなさい！」

鼻を覆うのを堪える側で2人はじゃれる。僕はとにかく早く、車の発進を願った。

なるちゃんは笑ってはいるが分かってもいる。ストレスがあるのかって質問を誤魔化されたのをきちんと把握しているはずだ。

走り出した車内に風が通る。

なるちゃんは髪を整える振りして、いつか切れるカードをそっとポケットに忍ばせた。

牧野ユズの自宅は学校から１０分程度走った所にあるドラッグストアの隣だ。車はドラッグストアの駐車場に停められ、まず相沢は店先へ向かった。

「あなた達、そんな所にたまらない！　お店の方に迷惑でしょ！」

自動ドア付近ではクラスメイトがアイス片手に座り込んでいる。相沢の姿を確認するなり側の自転車へ飛び乗り、反省の言葉がないまま去って行く。

降りないよう命じられた僕らは様子を無言で眺めている。２人になるとなるちゃんは無言だ。ウォークマンを取り出し、歌のない曲を聞き始める。店内に入っていった相沢が見回りがてら店側へ謝罪するとよんだのだろう。

しゃかしゃか、音が漏れている。

そのうち目も閉じた、なるちゃん。

僕もサイドミラーから探るのは止めてウォークマンを出す。このウォークマンは入学祝いとして贈られたもので、なるちゃんとお揃いだ。

なるちゃんはメロディーだけを好み、歌は邪魔だと言う。逆に僕はメロディーだけじゃ寂しく、出来るだけ歌詞が理解出来る曲を選ぶ。今、流しているのはスティックサイダーの新曲で父が買ってくれた。

最近、父は僕が好むものを知りたがる。それは僕の好きなものを知っていると母が喜ぶからだ。

回るカセットが僕の家族に重なる。僕らの気持ちは巻き込みなが

ら膨れる一方、すり減っていく。

そう言えば、相沢は牧野ユズが僕に似てると言った。
すかさず冴えない部分が共通点だとなるちゃんに突っ込まれたが、首は横に振られる。

僕は最初、その仕草を生徒に対し「冴えない」とは言えないからだと受け取った。けれど会話していくうち、相沢に明確な答えが無いのが分かる。つまり、かぶりを振ったのは分からない、そういう意味だった。

言った本人が分からないなら、どうしようもない。どうしようもないが牧野ユズについて考えたくはなる。

僕の中の牧野は物静かに座っている。挨拶ぐらい交わしたかもしれないが、声の印象が全く無い。ただただ静かに腰掛ける映像しかない。

それはなるちゃんも同じ様で、彼は名前と顔が一致しないと言う。

『ユズ』響きは可愛いが、想像したら駄目だ。名前負けをしないようなら認識出来ているはずだ。

とは言え、牧野が美少女であってもなくても見舞いが面倒なのに変わりは無い訳で。
相沢が感じた通り、牧野が僕と似ていれば牧野だって面倒に違いない。それとも今日の僕みたいに教師へ黙って従い、その場をやり過ごすのだろうか。波風を立てたりせず、表面を撫でる。分かった振りと納得した真似をするんだ。

「お待たせ、行きましょう！　」

相沢がやっと帰ってきた。エンジンを止められると、すぐ真夏に襲われる。慌てて下車しても駐車場の照り返しが厳しい為、なかなか歩き出せない。
額の上へ手を翳す。正面には園芸用品が並べられている。この炎天下、農作業をしようなど僕には到底信じられない。

と、その瞬間。僕の中をすとん、何かが落ちていった。

母は家庭菜園を持っている。もはや趣味の域を出た本格的なもので、お裾分けをすれば菓子や野球の観戦チケットで返ってきたりした。
あの日、野球のルールなど知らない両親はメガホン片手に帰宅すると試合内容を話してくれた。野球選手を目指していた僕に、だ。
夢を諦めたにしろ、チケットがあるなら僕が行きたかった。話を聞くうち不機嫌になる僕を父は殴る、母が止める、結果僕が謝る。

遠い目のまま、無意識に左頬を押さえていた。
なるちゃんがこちらを見て、目が合うと反らされる。
相沢はすでに牧野の自宅前に立っており、手招きしている。

「なぁ」

歩き出すと、なるちゃんが呟く。

「お前、おじさんに殴られてんの？」

僕は足を止めない。むしろ、なるちゃんを追い抜く。なるちゃんの独り言に付き合ってはならない。返事をしても茶化されるだけだから。

――いや、違うか。

「殴られていると言えば助けてくれるのか」と叫び出しそうで答えられないんだ。

3

3

一言で表せば牧野の家は気味が悪い。窓という窓が正面の太陽を遮って風もないのに雨戸は揺れている。
相沢が気丈にインターホンを鳴らすが反応は――無い。室内から気配を感じるものの、実際そのドアが開かれるのを僕らは望んでいない。牧野を見舞えなくとも、見舞いに来ただけで充分だ。

相沢は春の家庭訪問の際、何も感じなかったのだろうか。なるちゃんと相沢を挟んで目が合う。そして反らされる。

「春にお邪魔した時はこんな風じゃなかったわ」
「こんな風って」
「だって、これが通常？」

反射的に茶化したなるちゃんに食ってかかり、軒先を指さす相沢。庭であろう空間へゴミ袋が高く積まれている。
こんな良い天気でも洗濯物は干されない。錆び付く物干し竿が救いを求める風で、強く吹けば折れてしまいそう。
相沢の足が踏み込むか、いなかで迷い出す。

「せんせ、牧野死んでるかもしれないよー」
「なんて事を言うのよ！」
「だってこんな家、人間なら住めないだろ？」

なるちゃんは真っ先に踵を返し、僕もそれに続く。まぁ、死んではないだろう。それにこの息の殺し方は、僕らが去る事を願ってい

る。僕には分かる。

「あの」

こんな僕らを呼び止める声は、何故か正面からした。3人の視線を一手に受ける牧野は制服を来ている。

「うちの前でどうしたんですか？」

「どうしたって！　あなた学校を3日も休んでるのよ？」

「あ、あーはい」

相沢は至って健康そうな牧野に駆け寄り、肩を揺らす。けれど牧野から謝罪の言葉は落ちてくることはなく、むしろ迷惑そうな表情に変わっていった。

「あーお見舞いに来てくれたんですね？　でもご覧の通り、私は元気なんで大丈夫です」

「てかさ、元気なのに学校を休んでる方が問題じゃねぇ？」

なるちゃんが割って入る。

「どーも、牧野ユズちゃん。俺の事、分かる？」

「お見舞いありがとう、成海くん」

なるちゃんに意思をしっかり伝えられる姿勢は凛としつつ、一度

崩れたら止まらなそうな脆さもはらんでいそうで。僕は牧野の影を見ている。強い日差しは影をより焦げ付かせ、輪郭を明確にする。牧野に脆さを感じたのは、牧野の影がこんなにも濃い所為だ。

「とにかく話し合いましょう！　ご両親は中に？」
「無駄ですよ」
「え？」
「両親は私が学校に行っているって思ってますから」
なるちゃんを通り過ぎ、僕の隣で足を止める。
「渡辺くんもありがとう」
牧野も僕の影を見る。

「あらら牧野ユズちゃんは記憶力がいいんだねー、クラスメイト全員の名前覚えちゃってるとか？」
「残念だけど、覚えてない」
牧野は振り返って、す、と相沢を刺す。
「私、先生の名前知りません」
人差し指で射抜かれ、相沢は固まる。それから牧野は無言で自宅に戻り、施錠の音を響かせた。玄関以外にもロックを掛けるように。明言はされなかったが、牧野が欠席する原因は少なからず相沢にあるらしい。相沢はドアが閉まってから理由を知りたがる。

「ねぇ、君たち何か聞いてない？」
「知らねえよ」
なるちゃんは肘を抱え、続ける。
「牧野ユズって、気持ち悪い」
同感だ。牧野ユズは住んでいる家と同様、気味が悪い。学校をサボっているのに後ろめたさなどなく、教室内とは１８０度違う雰囲気を漂わす。
なんと表現したらいいのだろう。今の牧野ユズは薄い膜に包まれている。例えば油膜みたいなもの、だ。膜の内側にはどろどろした液体が溜まって向こうを見せない。もし爪を立てれば、中身が僕を飲み込むのだ。
頭の中にゆっくり沈む僕が描かれる。底へ引きずられる手足をやっとの思いで動かすと、粘った糸が引く。

「おい！」
なるちゃんに背中を叩かれ、我に返る。
「せんせが泣いてるんだぜ？　なんか言ってやれよ！」
相沢は顔を覆い、道の中央でさめざめ泣いていた。たぶん、相沢は痛くて泣いているんだ。自分が可哀想だって泣いている。
流石の相沢も生徒全員に好かれているとは思っていないだろう。とはいえ牧野に否定されるのは悔しい。そして牧野はそんな見下しに気付いていたんだ。

僕には掛ける言葉は見つかりそうもない。慰めを受けられないと判断した相沢は、再びインターホンを押す。

相沢は涙をこぼしながら牧野を呼び出し続ける。相沢が牧野に言葉を投げ掛ける度、ぴんぽーん、とインターホンが続く。

「先生に話したくないの？」

ぴんぽーん。

「明日も学校へ来てくれないの？」

ぴんぽーん。

悔し泣きにしろ、泣くことはないと思う。確かに名前を知らないって言われたのは強い拒絶だが、こんな事で牧野が応じるとは考えられない。

――という事は、呼び出したいのは保護者か。

相沢の必死さに僕となるちゃんは背を向ける。結局、相沢は自分を牧野に謝罪させたいだけだ。

「なるちゃん、童貞あげなくて良かったの？」

なるちゃんの髪へ絡まるよう、言葉を投げ付ける。

「初めては好きな人に捧げるって決めてるんだ」

すると棒読みで返される。てっきり無視されると思っていたから会話が続かない。何より、答えに笑っていいのか分からない。なるちゃんはタイミングよく髪を掻き、僕の意地悪を振り払う。

「なぁ、せんせは牧野ユズみたいな生徒でも構ってやってる自分が好きなんだよな？」

「うん」

即答する僕へ振り返る、なるちゃん。女子の受けがいい切れ長に睨まれ、今度は意地悪される側に立たされる。

「手、繋いで帰るか？」

「いやだ」

即答した。

「バカか、冗談だよ！」

「うん」

即答した。

なるちゃんはそれ以上は言わず、差し出した手をピースにすると再び前を歩き始める。ところで牧野もこの道を通って通学しているのだろうか。交通量が多い割に道幅は狭いし、脇に並ぶアパート等が臭う。我慢出来なくなった僕は鼻と口を覆った。

擦れ違う女性の大半が灰色の作業着を着ており、ドラッグストアのレジ袋を持っている。たぶん夕飯の買い出しだろう。とにかく女性等は家路を急ぎ、肩がぶつかっても謝る間も無い。
で、3度目に肩が触れた時、僕は立ち止まってみた。歩いてきた道を振り返れば、道路も建物も壁も女性もみんな灰色。
僕の近所も決してよい環境とは言えないが、もう少し色と余裕みたいなものはある気がする。

この景色が牧野ユズを作ったとするなら、教室内で見せていた物静かな雰囲気が闇に見えてしまう。大人しい性格ではなく、落ちるように暗いんだ。

相沢を指さした牧野の姿が過ぎり、寒気に似た感覚に襲われる。そして今更だが残してきた相沢が気になってくる。

「なるちゃん！」

随分先を歩くなるちゃんを呼ぶ。

「なるちゃん、ちょっと牧野のところに戻ろうよ！」

声は届く距離だが、返事は無い。妙な緊張が嗅覚がより尖らす。やっぱり、なるちゃんは戻らない。
僕は1人で向かうことにし、頬に爪を立てると臭いが強くなる方へ駆け出した。

爪先に力を入れて走ると、サイズがいまいち合っていないスニーカーがぱこぱこ鳴る。忘れよう、もう忘れようって何度言い聞かせても、ハイカットがくるぶしを擦れば野球の記憶を呼び起こしてし

まう。乱暴に目元を拭い、汗と涙は混ぜてしまえ。

丁度いい。鼻の奥が、つん、とした。

4

4

牧野の家が見えてきた時、ぴーぽー、サイレンに肩を叩かれる。すぐ脇に寄って救急車を見送るが、ふいに牧野の家の前で停まるんじゃないかと過ぎる。気付けばズボンを握り、どうか停まらないでと願う僕が居た。そして救急車は角を曲がっていく。

誰かは苦しんでいるのだから幸いとは言えないが、電柱へ額を預けて緊張を抜いた。気付けば肩で息をして、たったあれだけの距離なのに辛いらしい。筋肉が落ちた手足が幾ら正直に訴えようと認めてはやらない、認めたりしたら野球を持ち出すから。

電柱に汗が染み込み、鼓動が落ち着くまでここから空を仰ぐことにする。カラスが何匹も停まる電線は空を切り分けるみたいだ。

「渡辺くん？」

どうしてか牧野は予期しない方向から声を掛けてくる。ちりん、鞄に付けた鈴が鳴る。

「どうしたの？　先生なら送っていったけど？」

目が合い、牧野は首を傾げた。そうしたって別段可愛くなかったが、似合わない訳でもない。柔らかそうな髪が肩へぶつかり、毛先が膨らむ。

「他に何か用？」

「用って言うか……」

「ゴミ屋敷見学とか？」

ちっとも笑えないことを言う。牧野も電柱に寄りかかり、僕を覗く。

「前髪上げてると感じが違うね」

額を見せてきた。すると牧野は眉の辺りに傷があり、瞼の中央まで走っている。傷が故意に付けられたものと判断出来た僕はすぐ目を反らす。

「幼くなるんだろ？　おでこ出すと」

「えー、なんで隠すの？　そもそもわたし達は子供じゃん」

牧野の口調は軽薄とまで言わないが、心を込めているとはとても思えない。子供なんて口に出しつつ妙に大人びた姿勢を見せつけるんだ。ポケットからベルを取り出し、文面に舌打ちしたり。

「ポケベル持ってるんだ？」

「うん、おにいちゃんが買ってくれたの。で、早く帰って来いって」

指で目の下をなぞる牧野。よく見たら睫毛にマスカラが乗せられている。女子はやたら派手な化粧をするから、牧野の化粧を見落としていた。

「化粧とかするんだ？」

「するよ、わたしだって女だもん」

言われて詰まった。そして意識してしまう。牧野は異性で、こうして向き合っている状況に胸が騒ぐ。自分の立ち位置を子供とか女に変えられるのが艶めかしかった。可愛いとかキレイじゃない領域

で牧野は立っている。

「でさ渡辺くん、用件があるなら早く言ってくれない？」
「相沢が」
「え？」
「相沢が僕と牧野は似ているって言ったんだ」

自分でも何を口走っているか戸惑うのだから、牧野はより怪訝な顔付きをする。だから何、そう言わせる前に続けた。

「相沢は文芸部の課題どうする？　何かオススメのがあったら教えて欲しいんだ」

どうにか着地させた声を2人で見下げる。スニーカーへ牧野の影が映り込み、少ししてから揺れた。

「なに、それ。変な質問」
「……ごめん」
「なんで謝るの？　そーだなー、わたしはやっぱり恋愛小説が好き」

顔を上げてみる。

「あれ意外？」
「ちょっと」
「はは、でしょ？　本、全然読まないんだ。だから逆に渡辺くんのオススメを貸してよ」

牧野は言いながら隣を通り過ぎて行った。

「明日も明後日も休むから、この先の神社で待ってるね」

背中に回した手を握って開くを繰り返す。バイバイって意味だろう。

土地勘の無い僕は道の先に神社があるかは分からない。神社など無くて僕など待っていないかもしれない。けれど、こんな約束が嫌いじゃなかったりもする。

牧野の背中は小さくなり、救急車と違う方向へ曲がっていく。

今日の事がなければ牧野ユズというクラスメイトを一生勘違いしていたと思う。卒業したら一度も思い出さない、そんな存在になったはず。それが、いつか大人になった僕には牧野ユズが過ぎる瞬間が訪れると断言出来てしまうんだ。

ふいに胸が締め付けられ、痛みは野球を諦めた時に似ていた。

帰り道はゆっくり歩いた。相沢の車には間に合わないだろうし、なるちゃんに追いついてしまったら困る。今、僕は無口じゃ居られないから。牧野のことを話し、なるちゃんに興味を持たれたら厄介だ。

そう言えば、なるちゃんと同じテレビゲームをする際、僕は1人こっそり攻略本を読む。ジャンルが何であろうと行き当たりばったりなるちゃんに対し、レアなアイテムは入手。裏技を駆使しないと気が済まない僕。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3326z/

月に天ぷら

2012年1月2日02時45分発行